

Title	多数の銭貨を有する六道銭について
Sub Title	The quantity of the Kanei copper coins (寛永銅銭) in circulation : an archaeological analysis of the Rokudosen (六道銭), buried coins as grave goods
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1993
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.62, No.3 (1993. 1) ,p.1(213)- 16(228)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19930100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

多数の銭貨を有する六道銭について

鈴木 公雄

目次

- 一、六道銭の枚数と銭貨量
- 二、一〇枚以上の六道銭のセリエーション
- 三、六道銭完全セットのセリエーション
- 四、分析結果の比較と評価

一、六道銭の枚数と銭貨量

中世後期から近世の全般にわたる埋葬習俗として、六道銭と呼ばれる銭貨の副葬が知られている。筆者はそこに含まれる銭貨の種類を数量的に分析することから、中世後期～近世前期にかけての銭貨流通の動態を明らかにしてきた（鈴木一九八八、一九九一、一九九二b）。すなわち中世後期から近世初頭にかけて流通していた渡来銭から、寛永一三年～二〇年にかけて鑄造された古寛永通宝への流通銭貨の交替を、墓に副葬された六道銭の銭

種の組み合わせの出現頻度のパターンとして示すことができ、その結果渡来銭から古寛永通宝への流通銭貨の交替は、文献史料などから従来予想されていたよりも迅速に行われたと考えられることになった。

筆者がこのような分析を行った際に用いた資料は、六道銭のうちで六枚一組となっている「完全セット」のみであった。これは六枚という銭貨の枚数を出土した墓が全出土六道銭の中で最も多数を占めることと、六枚という枚数が墓地における後世の追葬、改葬などによる重複や攪乱を受けていない、本来副葬された時の銭貨の枚数を示していると考えられることにもとづいていた（鈴木一九八九）。この点は図1および表1に示した六道銭を出土した墓の総数を六道銭の枚数によって出現頻度を求めた結果に明瞭に現れる。図1及び表1のグラフの左側

図1 枚数別六道銭出土墓数(左)と銭貨数量(右)

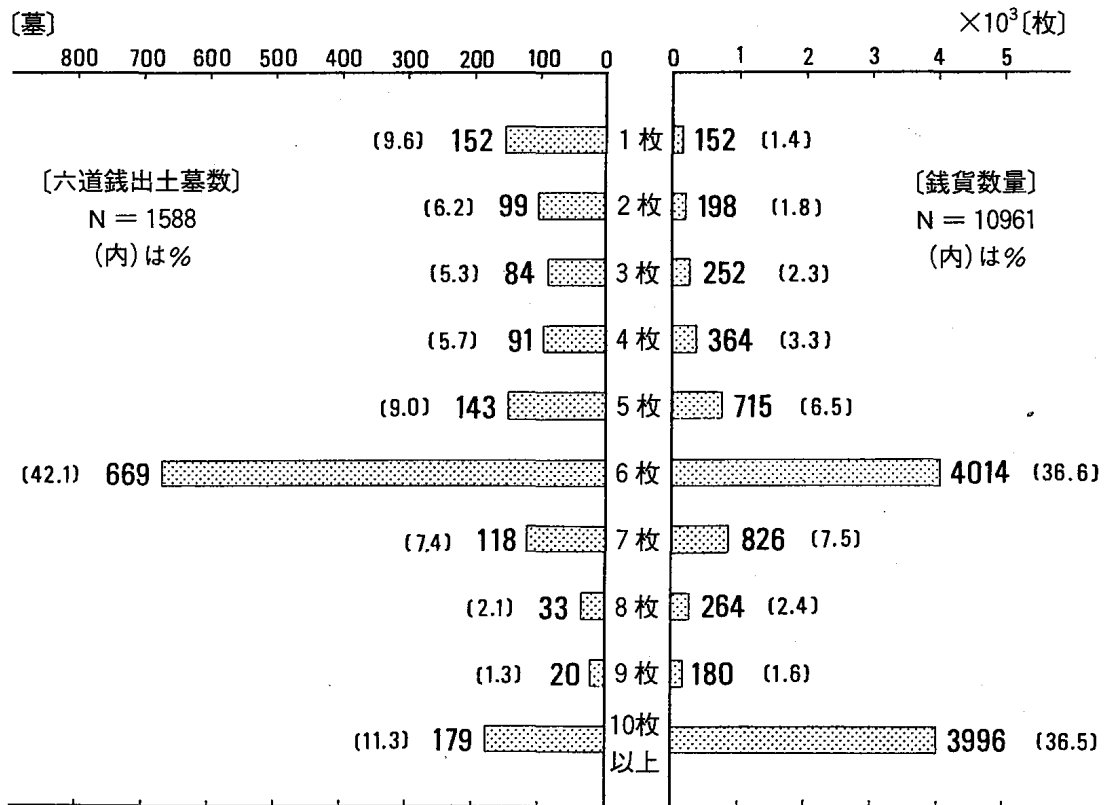


表1 枚数別六道銭出土墓数・銭貨数量

%	墓 数	枚 数	銭貨量(枚数)	%
9.6	152	1枚	152	1.4
6.2	99	2枚	198	1.8
5.3	84	3枚	252	2.3
5.7	91	4枚	364	3.3
9.0	143	5枚	715	6.5
42.1	669	6枚	4014	36.6
7.4	118	7枚	826	7.5
2.1	33	8枚	264	2.4
1.3	20	9枚	180	1.6
11.3	179	10枚以上	3996	36.5
100.0	1588墓	合 計	10961枚	99.9

に示したものは一九九二年四月現在の全国出土六道銭の集計で、その分布は青森県から鹿児島県に及び、総墓数は一五八八墓である。これを見ると「完全セット」の六道銭が全体に占める量は六六九基約四二%と圧倒的な量を示し、二位の一〇枚以上の六道銭一七九基(約一一・三%)三位の一枚の六道銭一五二基(約九・六%)を大

大きく引き離している。

しかし、観点を変えて図1の左側のグラフをそれぞれの六道銭の枚数ごとに出土している銭貨の数量に変換してみると、「完全セット」の六道銭以外にも、別途にとりあげて分析を加える必要があることがわかる。図1の右側のグラフは枚数ごとの墓の数ではなく、それらの墓から出土した銭貨の数量を示したものである。これによると、「完全セット」六六九墓から出土した銭貨量は六六九×六枚すなわち四〇一四枚、全出土銭貨量一〇九六一枚の約三六・六%となり、先に示した全六道銭出土墓中に占める「完全セット」の割合四二・一%と近似した値を取ることが確かめられる。しかしながら、図1の左側のグラフで二位になっていた、一〇枚以上の六道銭を出土した墓から得られた銭貨量は三九九六枚も存在している。これは全銭貨量の約三六・五%にも相当するもので、さきの「完全セット」の銭貨量四〇一四枚、二六・六%とほぼ等しくなる。

このような現象が生じた理由は、一〇枚以上の銭貨を出土する六道銭は出土例数(墓数)が少なくても、個々の墓に含まれる銭貨の数量が他の六道銭に比べて多量に存在している点によるものである。最も多量の銭貨を持

つ六道銭は中世墓の場合は鳥取県徳尾一号墳の八六枚(鳥取県教育委員会一九八五)、近世墓では岩手県大平B一二号墓の一〇九枚であるが(一関市教育委員会一九八五)、以下七〇枚台、六〇枚台、五〇枚台と大量の銭貨を含む例が存在しており、結果として墓の数に比べて出土した銭貨量が著しく多くなったのである。以上のことから、六道銭に存在する銭貨の種類の組み合わせを数量的に分析するに当たっては、六枚一組の「完全セット」を取り上げるだけでなく、それとほぼ等しい銭貨出土量を有する一〇枚以上の六道銭についても同様の分析を加える必要があることがわかる。本稿はこのような観点から、一〇枚以上の銭貨を出土した六道銭について取り上げてその銭種組成の数量的分析を行い、従来筆者が得てきたのと同様の結果が得られることを明らかにしたい。なお、本稿で取り上げる六道銭出土遺跡については、多数にわたるため個々の遺跡についての紹介は行わず、その出典を参考文献末尾に「資料」として一括提示しておく。

二、一〇枚以上の六道銭のセリエーション

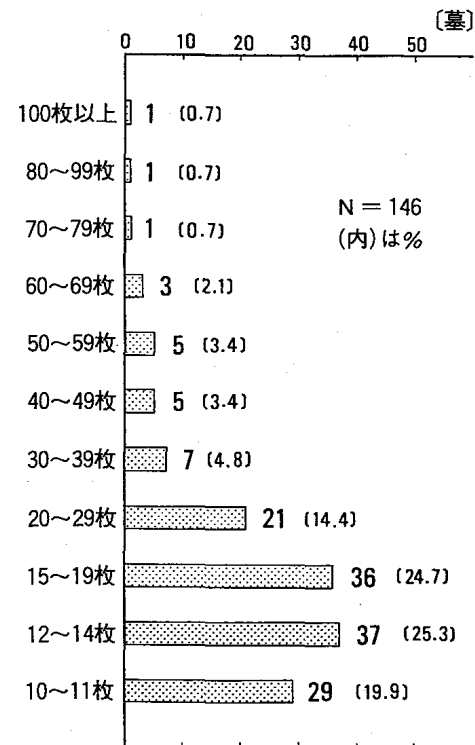
一〇枚以上の銭貨を有する六道銭は表2のAに示した

表2 10枚以上の六道銭の枚数分布

A 資料全体		枚 数	B 分析可能資料	
%	墓 数		墓 数	%
1.1	2	100枚以上	1	0.7
1.1	2	99-80枚	1	0.7
1.7	3	79-70枚	1	0.7
2.2	4	69-60枚	3	2.1
2.8	5	59-50枚	5	3.4
3.9	7	49-40枚	5	3.4
5.6	10	39-30枚	7	4.8
14.0	25	29-20枚	21	14.4
22.3	40	19-15枚	36	24.7
26.8	48	14-12枚	37	25.3
18.4	33	11-10枚	29	19.9
100.0	179墓 3996枚	合 計	146墓 3051枚	100.1

ように全国で五二遺跡一七九墓、銭貨量として三九九六枚存在するが、そのうちで詳しい銭種の同定が行われていなかったり、出土した銭貨の保存状態が悪かったため正確な銭種を決定できなかった例や、一七八四年（天明四年）仙台藩内で鑄造された仙台通宝のような、特定の地域内での流通のみを目的とした銭貨を多数含んでいる

図2 10枚以上の六道銭の枚数分布
(分析可能資料：146墓/3051枚)



六道銭などが存在しており、これらは今回の分析に用いることができない。それらを除外すると、表2のBにみられるように利用可能な資料は青森県から鹿児島県にいたる四四遺跡一四六墓、銭貨量としては三〇五一枚になる。それらが個々の墓においてどの様な枚数をとるものが多いのかを示したものが図2である。それによると、三〇枚以下の枚数を持つ例が一二三墓に及んでおり、全体の約八四%を占めている。三〇枚以上の銭貨枚数を持つものは二三例で、七〇枚以上の墓はわずか三例にすぎない。このような点からみて、一〇枚以上の銭貨を副葬する六道銭においても、三〇枚以下の枚数になるものが一般的で、それ以上の枚数を持つものは例外的な存在で

あったことがわかる。

しかしこれらの大量の錢貨を有する例を詳しくみてみると、渡来錢のみ八六枚が出土した鳥取県徳尾一号墳、二枚の渡来錢と五七枚の古寛永通宝の計五九枚の錢貨が出土した群馬県北原二二号（群馬県教育委員会一九八六）、一六枚の古寛永通宝と三九枚の文錢の計六五枚の錢貨が出土した東京都芝公園A M一六五号（港区教育委員会一九八八）、一四枚の古寛永通宝、八枚の文錢、三枚の新寛永通宝の計五三枚の錢貨が出土した岩手県大平A四七号、六七枚の寛永鉄錢が出土した岩手県大平三七号、さらには今回の分析には利用できないが仙台通宝のみが一〇九枚も出土した岩手県大平B一二号など、様々な時期の錢貨に及んでいる事がわかる。それゆえ、大量の錢貨を六道錢として副葬することは一時的な流行のようなものではなく、中世から近世にかけて僅かではあるが確実に継承された習俗であったと考えられる。

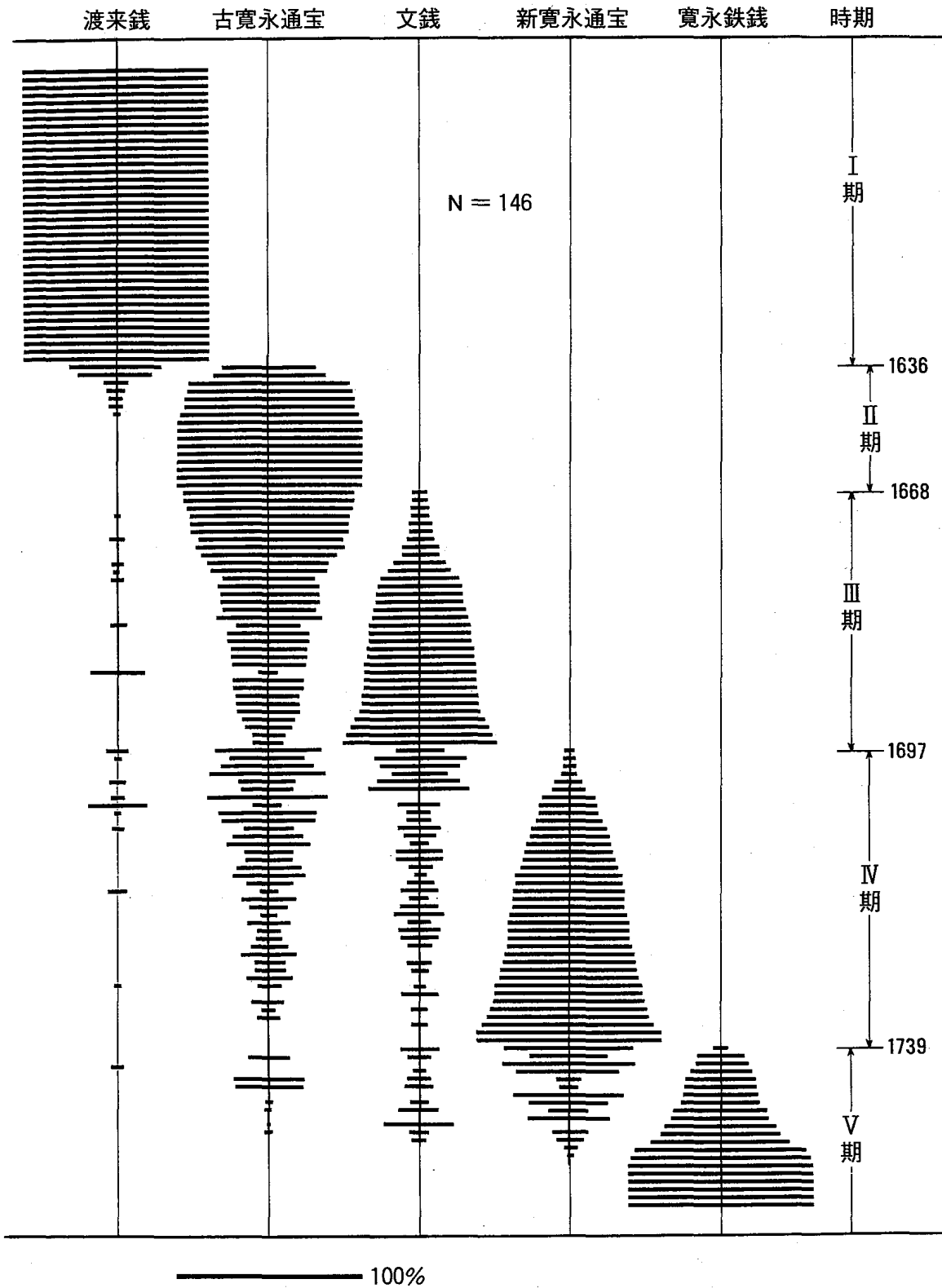
全国一四六墓三〇五一枚の六道錢に含まれる各種錢貨の組み合わせを、従来筆者が行っている出現頻度によるセリエーションで示したのが図3である。ただしその処理の方法は従来の六枚一組の「完全セット」で行っていた場合とは若干異なっている。それは出現頻度を標準化

多数の錢貨を有する六道錢について

する際の方法で、従来の「完全セット」では全ての六道錢が六枚の錢貨のみであるため、そのなかに含まれる錢種の出現頻度の絶対値をそのままグラフ上に表現すればよかった。それには、今回の一〇枚以上の六道錢においては個々の六道錢の枚数自体が異なっているので、それぞれの錢種の出現頻度を百分率によって標準化してやる必要がある。出現頻度のセリエーションを作成する際は、むしろこのような方法が一般的で、さきの「完全セット」のような処理の仕方はむしろ特殊な方法と云うべきものである。取り扱う個々の六道錢の錢貨数量が一〇枚以上となるため、百分率による標準化を行った結果「完全セット」のセリエーションよりも自然な出現頻度のパターンになった。

この図3に示されたグラフのパターンをみると、渡来錢から古寛永通宝への移行が極めて不連続であることが明確に現れている。それには、古寛永通宝から文錢、新寛永通宝、さらには寛永鉄錢への移行は極めて漸移的であって、従来の「完全セット」によるセリエーションのパターンとよく一致している（鈴木一九八八）。渡来錢は寛永鉄錢の時期まで残存しているが、量的には極めて少量であり、古寛永通宝、文錢、新寛永通宝の三

図3 10枚以上の六道銭のセリエーション



者の移行のパターンとは明確に異なっている。それはこれら三種の寛永銅銭は基本的には同時に通用していた銭貨であり、そのような状況のなかで新しく発行された銭貨が次第に流通量を増大させつつ、すでに流通していた先行の銭貨を量的に凌駕していく状況を示すものと言えらる。渡来銭の移行のパターンがこれら三種の寛永銅銭と明確に異なるのは、渡来銭が銭貨の流通量においても、流通期間においても、急激に古寛永通宝と交替していった結果を示すものに他ならない。

図3のグラフのパターンでいま一つ注目すべき点は、新寛永通宝が次第に流通量を増大させていく際の古寛永通宝、文銭の残存パターンである。新寛永通宝が増加していくに応じてこの二種の銭貨は次第に減少していくが、古寛永通宝の方が文銭よりも量的に多く残存している。これは古寛永通宝の貨幣量が文銭よりも多かつたことにより、このようなパターンが表れたものと考えられる。文銭のみからなる六道銭が存在しないこともこの点を裏付けるもので、古寛永通宝のみからなる六道銭が九例、新寛永通宝のみからなる六道銭が二例、寛永鉄銭のみが六例存在するのに対して、文銭の場合は全て古寛永通宝、新寛永通宝といった前後に発行された銭貨と共伴してお

多数の銭貨を有する六道銭について

り、文銭のみが単一に存在している例はみられない。この事実は、同時に流通していた他の銭貨を圧倒して、文銭のみのからなる六道銭を構成できるだけの貨幣量を、文銭が持つていなかったことの現れとみることができ。この点についてはさらに後段で「完全セット」の六道銭のセリエーション・パターンを分析する際に詳しく取り上げる。

三、六道銭完全セットのセリエーション

六枚一組の「完全セット」は表1に示したように六六九例存在しているが、これは六枚の銭貨を出土した墓の総数であつて、それらの内には報告書に銭銘が記載されていないなかつたり、鑄その他のによつて銭銘が判読できなかったり、古寛永通宝、文銭、新寛永通宝の三種を区別せず、単に寛永通宝とのみ記載しているものなどが含まれている。これらのような銭種の同定ができなかつた資料を除くと、セリエーション分析に使用できる「完全セット」は五三六例となる。この五三六例について、従来の方法でセリエーション・パターンを示したのが図4である。

図4のパターンをみると、渡来銭から古寛永通宝への

図4 六道銭完全セットのセリエーション

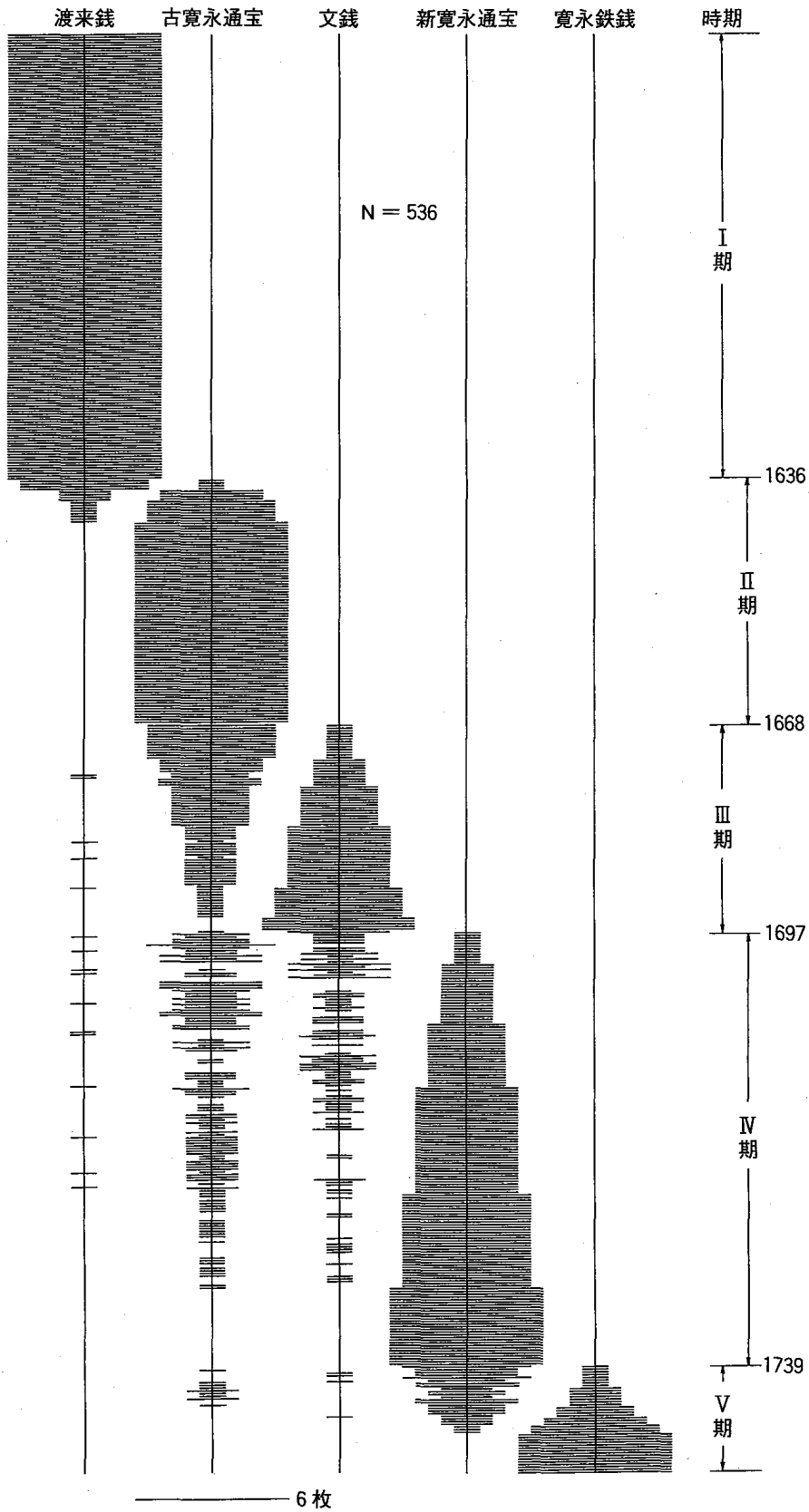
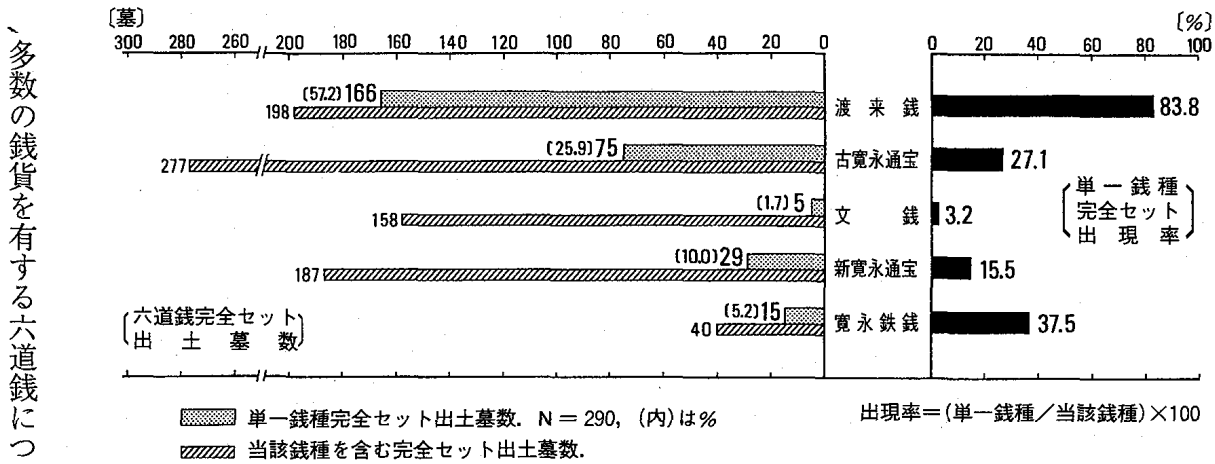


図5 六道銭完全セット出土墓数(左)および単一銭種完全セット出現率(右)



(注) 「単一銭種完全セット」は、6枚の銭貨が全て同一の銭種から構成されている。「当該銭種を含む完全セット」は、「単一銭種完全セット」数と、その特定の銭種が、他の銭種と組合さって完全セットを構成する数とを合算している。したがって、それぞれの銭種で重複して計算されるから、その例数は「単一銭種完全セット」の例数よりはるかに多くなる。

移行にみられる不連続な交替のパターンと、その後の古寛永通宝の急激な展開、古寛永通宝から文銭、新寛永通宝への漸移的な交替のパターン、寛永鉄銭の増加のパターンなどが明確に表れており、これは従来から筆者が明らかにしてきたこれらの銭貨の流通の動態を良く示している。これと図3に示した一〇枚以上の銭貨を持つ六道銭のセリエーション・パターンとを比較してみると、驚くほどの類似が認められる。これは「完全セット」と一〇枚以上の六道銭という異なった二つの資料群に含まれる銭貨の組み合わせが、極めて近似していることを示すものに他ならない。換言すれば、出土六道銭の銭種の組み合わせの分析においては、六枚一組の「完全セット」の分析結果が全体の傾向を代表しうることを示すものである。

以上の点はすでに一〇枚以上の六道銭の分析において指摘した、古寛永通宝、文銭、新寛永通宝の貨幣量の推定についても同様である。さきにこれら三種の寛永銅銭の残存のパターンを比較することから、文銭の貨幣量が他の寛永銅銭に比べて少なかったのではないかと推定したが、これは表3及び図5に示した六道銭単一銭種完全セットの出現率を検討することにより、より確実な事実

表 3 六道銭単一銭種完全セット出現率

銭種	単一銭種の 完全セット	%	当該銭種を含む 完全セット	出現率(単一銭種墓数÷ 当該銭種墓数×100)	
渡来銭	166	57.2	198	166/198	83.8
古寛永通宝	75	25.9	277	75/277	27.1
文銭	5	1.7	158	5/158	3.2
新寛永通宝	29	10.0	187	29/187	15.5
寛永鉄銭	15	5.2	40	15/40	37.5
合計	290墓	100.0			

(注)「単一銭種完全セット」は、6枚の銭貨が全て同一の銭種から構成されている。「当該銭種を含む完全セット」は、「単一銭種完全セット」数と、その特定の銭種が、他の銭種と組合さって完全セットを構成する数とを合算している。したがって、それぞれの銭種で重複して計算されるから、その例数は「単一銭種完全セット」の例数よりはるかに多くなる。

として捉えることができる。この表3及び図5は完全セット五三六例のうちで、ただ一種類のみの銭貨からなる六道銭の数を各銭種毎に示し、それらの出現率を計算した結果である。それによると、単一銭種からなる完全セット(以下「単一銭種完全セット」と呼ぶ)は全体で二九〇例存在しているが、この中で文銭のみからなる完全セットは僅か五例しか存在していない。この数値は新寛永通宝の二九例、寛永鉄銭の一五例と比べてそれほど差のある数値ではないと考えられるかも知れないが、それらの数値を絶対値で比較するのではなく、それぞれの出現率に変換してみるとその違いの持つ意味が明確なものとなる。

表3には「当該銭種を含む完全セット」という項目があるが、これは特定の銭種を一枚以上含む完全セットの総数を示すものである。たとえば渡来銭の項目で見ると一九八例の存在が示されているが、これは渡来銭のみの六道銭にくわえて、渡来銭と古寛永通宝、文銭、新寛永通宝とのいずれかあるいは複数とが組み合わさって、一つの「完全セット」を構成している六道銭が全部で一九八あることを意味している。したがって、六枚の渡来銭のみからなる「単一銭種完全セット」の出現率は、一六

六を一九八で除して一〇〇を乗じた八三・八となる。同様の方法でそれぞれの「単一錢種完全セット」の出現率を求めてみると、文銭の出現率が三・二と他に比べて著しく低いことがわかる。これはさきに指摘した「単一錢種完全セット」の数が少ないことだけでなく、文銭とそれ以外の錢種とから構成される「当該錢種を含む完全セット」の数が一五八例も存在していることによるものである。つまり、文銭のみの「完全セット」は極めて少ないが、文銭とその他の錢種とからなる「当該錢種を含む完全セット」がかなりの数で存在していることが、このような結果を示す原因になったといえる。

それぞれの「単一錢種完全セット」の出現率を検討していくと、文銭と寛永鉄銭とにみられる「単一錢種完全セット」数の違いも明確に説明できる。寛永鉄銭の「単一錢種完全セット」は一五例存在しており、文銭について少ない。しかし寛永鉄銭とそれ以外の錢種で構成される「当該錢種を含む完全セット」の数は四〇例存在しており、その出現率は三七・五と三種の寛永銅銭よりも高い数値を示す。つまり寛永鉄銭は「完全セット」の総数は三種の寛永銅銭よりもはるかに少ないものの、そのなかで「単一錢種完全セット」を構成する率が高いことを

意味している。これは寛永鉄銭が完全セットの例数は少ないにもかかわらず、そのなかで寛永鉄銭のみの組み合わせを構成することが容易にできたのにたいし、文銭の場合は文銭を含む完全セットの例数は多いものの、そのなかで文銭のみの組み合わせを構成することができにくかったことを示すものである。このような結果は、文銭と寛永鉄銭との貨幣量の差、ひいては今回取り上げて分析を行っている各種の錢貨間の貨幣量の差に基づくものと考えられる。

渡来銭の「単一錢種完全セット」の出現率は八三・八と異常に高いが、これは中世後期には渡来銭以外の錢貨が殆ど存在していなかったことを考えれば、むしろ当然の結果と言えらる。渡来銭は一七世紀の前半までは確実に流通しており、少なくとも古寛永通宝の鑄造が開始された一六三六年から、幕府による公式の渡来銭流通禁止が通告された一六七〇年（寛文一〇年）にいたる三四年間は、古寛永通宝と共に混用されていた。したがって、この間に渡来銭と古寛永通宝の両者が組み合わさった六道銭が出現するチャンスは少なからず存在していたはずである。しかし古寛永通宝と渡来銭とが組み合わさる「完全セット」は一六例しか存在しない。それにたいして、

古寛永通宝と文銭とが組み合わさる「完全セット」は六七例も存在しており、古寛永通宝、文銭、新寛永通宝の三者からなる「完全セット」は四三例、古寛永通宝と新寛永通宝とが組み合わさる「完全セット」は五四例もある。これら全てを合計すると一六四例となり、いかに三種の寛永銅銭どうしの組み合わせが多いかがよくわかる。

古寛永通宝が鑄造されたのは一六三六年(寛永一三年)、文銭の鑄造が開始されたのが一六六八年(寛文八年)、新寛永通宝が発行されたのが一六九七年(元禄一〇年)、寛永鉄銭の鑄造が開始されたのが一七三九年(元文四年)であるから、これら三種の寛永銅銭はほぼ三〇年おきに流通市場に投入されたことになる。したがって、渡来銭を含めたこれらの銭貨が混用された結果として、それぞれの銭種が混じり合った「完全セット」を構成するチャンスは、それぞれの銭貨において時間的にはほぼ等しかったと見なすことができる。それにもかかわらず、渡来銭と古寛永通宝とからなる「完全セット」のみが少ないのは、従来から筆者が強調しているように、古寛永通宝の流通が短期間に大量かつ急激に行われ、渡来銭と古寛永通宝との流通銭貨の交替が速やかに進行した結果を示すものに他ならない。またこれと関連

して、文銭のみからなる「単一銭種完全セット」の出現率が他の銭種に比べて著しく低いのは、古寛永通宝、文銭、新寛永通宝という三種の寛永銅銭のなかにあって、文銭の貨幣量がもつとも少なかったことを示すものである。

四、分析結果の比較と評価

一〇枚以上の銭貨を有する六道銭をとりあげ、それらに含まれる各銭種の組み合わせを出現頻度のセリエーション・パターンとして取り出し、さらにその結果を従来筆者が取り上げてきた「完全セット」のセリエーション・パターンとの比較を行ってきたが、両者の対比から以下のような点が明らかになった。

① 一〇枚以上の銭貨を持つ六道銭のセリエーション・パターンは、従来検討してきた「完全セット」のセリエーション・パターンと全体として極めて良く一致する。

② これは一〇枚以上の六道銭に含まれる三九九六枚(分析可能数は三〇五一枚)と「完全セット」の六道銭に含まれる四〇一四枚(分析可能数は三二一六枚)との銭貨の内容が極めて類似していることを意

味する。

③ 以上の点からみて、出土六道銭の分析を行うに当たっては、六枚一組の「完全セット」による分析によつて全体の傾向を代表させることができる。

これらの点からみて、従来筆者が主張してきたように、出土六道銭の中心をなすものは六枚一組の「完全セット」であり、六枚という銭貨の枚数が本来の副葬に際して用いられる数であつたことが改めて確認できる。もちろん全ての六道銭が六枚という銭貨の枚数を必ずとらねばならなかつたわけではなく、桜木晋一も指摘しているように（桜木一九九〇a、b、一九九二）、南部九州地方とくに鹿児島県を中心とした地方には七枚一組の六道銭が目立って存在している。この理由については現在明確にできないけれども、何らかの習俗のない民間信仰的な意味によるものと考えられる。しかし、その分布と存在量は全国的規模で眺めたときは、やはり小規模な地域差の域を出るものではない。

一〇枚以上の銭貨を持つ六道銭によるセリエーション・パターンの分析を行う際の利点としては、出現頻度の標準化をパーセンテージで行うことができ、その結果としてグラフのパターンが「完全セット」のグラフのパ

ターンよりも自然な形になることである。しかし一〇枚以上の六道銭による分析は、その例数の少なさから全国レベルでの分析以外には使用できない。それにたいして、「完全セット」は極めて数多く存在しており、特定の地域毎に集計し分析を加えることができる。すでに東北地方、関東地方、近畿地方、北部九州地方などにおいては、十分な量の「完全セット」が収集されており、それにもとづくより詳細な地域毎の銭貨の流通動態が明らかになりつつある。また、東京都、埼玉県、千葉県、大阪府など中・近世遺跡の調査が進展している地域にあつては、さらに詳細な地域における銭貨の流通状況を復元することができ（鈴木一九九二b）。このような点からも「完全セット」のもつ重要性が理解できる。

「完全セット」による分析の利点は以上の点だけでなく、そのなかの「単一銭種完全セット」の出現率を明らかにすることにより、中・近世に流通していた各種銭貨の貨幣量を推定することができることにある。特定の銭貨の貨幣量の推定はその発行高についての記録が不十分な場合には困難となることが多く、ある程度の記録が残されている金銀貨をのぞいた銭貨については余り多くのことが語られていなかった。今回の「単一銭種完全セッ

ト」の出現率の分析によれば、三種の寛永銅銭のなかで文銭の貨幣量がもつとも少なかったとみられるが、これは文銭の鑄造量が他の寛永銅銭のなかでもつとも少なかった文献上の事実と一致している。このような観点からの検討が進めば、従来から不明の点が多かった中世後半―近世前半にかけての各種銭貨の流通実態を、貨幣量の多寡と言う視点からも検討することが可能になると期待できる。

以上の点と関連して注目すべきは、寛永鉄銭のみからなる「完全セット」の出現率が古寛永通宝や新寛永通宝などよりも高いことである。寛永鉄銭を含む「完全セット」は四〇例と寛永銅銭のそれに比べて少ないが、これは寛永鉄銭が本格的に流通し始めた一八世紀後半から一九世紀にかけての近世墓が、いまだ十分に調査されていないことによるものである。それにもかかわらず寛永鉄銭のみの「完全セット」の出現率が高いのは、寛永鉄銭の流通が先行する寛永銅銭の貨幣量を遥かに凌駕する規模で開始されたことによるものと考えられる。銭貨の質からすれば、寛永銅銭のほうが寛永鉄銭よりも好まれたことは間違いないから、死者の冥福を祈る副葬品であった六道銭としては、寛永銅銭からなる「完全セット」の

方が歓迎されたはずである。それにもかかわらず寛永鉄銭のみの「完全セット」の出現率が高くなるのは、寛永鉄銭出現後の銭貨流通においては、寛永鉄銭が大量に流通市場に投入されたため、寛永鉄銭のみの「完全セット」が出現するチャンスが著しく高まった結果であると考えられる。

このようにみてくると、一七三九年（元文四年）以降鑄造が開始された寛永鉄銭は、各地で相次いで鑄造されその流通量を増大させて行き、江戸時代中・後期の主要流通銭貨となっていたのだが、この点は今回のような出土六道銭の分析においても明確にあとづけることができる。出土銭貨の分析からみれば、江戸時代の銭貨流通の流れは、いまだ中世以来の渡来銭が公用銭貨として使用されていた一七世紀の前半、古寛永通宝の流通市場への大量投入とその急速な普及に始まり、文銭、新寛永通宝などの寛永銅銭の相次ぐ流通市場への投入によって特徴づけられる一七世紀後半から一八世紀の前半までと、寛永鉄銭の鑄造とその急速な普及に示される一八世紀後半から一九世紀にかけてという、三つの段階が存在していたと考えられる。

本研究は平成四年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）「中・近世出土銭貨の研究——考古学的手法による銭貨流通史の復元——」（課題番号〇四六三〇〇四五）による研究成果の一部である。

参考文献

石川長喜（一九八三）「発掘された墳墓について」『岩手県埋蔵文化財センター紀要』Ⅲ

一関市教育委員会（一九八五）『大平遺跡』

群馬県教育委員会（一九八六）『北原遺跡』

齊藤 隆（一九八二）『富山県魚津市 印田近世墓——発掘調査報告書——』魚津市教育委員会

桜木晋一（一九九〇a）「九州の六道銭研究の現状と課題——考古学的観点から——」『九州帝

京短期大学紀要』二

——（一九九〇b）「二七・一八世紀における寛永通宝の流通状況」『史学』五九—一

——（一九九二）「九州地域における中・近世の銭貨流通——出土備蓄銭六道銭からの考察——」『九州文化史研究所紀要』三六

鈴木公雄（一九八八）「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通」『社会経済史学』五三一—六

——（一九八九）「出土六道銭の枚数と墓の保存状態」慶応義塾大学民族学・考古学研究室編

多数の銭貨を有する六道銭について

『考古学の世界』所収 新人物往来社

（一九九二）「地中から掘り出された近世像」『争点 日本の歴史』五 江戸時代 近世編

（一九九二a）「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』六一—三・四

（一九九二b）「渡来銭から古寛永通宝へ——出土六道銭からみた近世前期銭貨流通史の復元——」『坪井清足古稀記念論文集』所収 天山社

鳥取県教育委員会（一九八五）『徳尾遺跡群発掘調査報告書』港区教育委員会（一九八八）『増上寺子院群』

資料

八戸市教育委員会（一九八二）『史跡根城跡発掘調査報告書』V、X

岩手県教育委員会（一九八〇）『東北縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ

岩手県教育委員会（一九八一）『御所ダム建設関連遺跡』

岩手県教育委員会（一九八二）『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XIV

岩手県埋蔵文化財センター（一九八六）『水神遺跡発掘調査報告』

一関市教育委員会（一九八五）『大平遺跡』

福島県教育委員会（一九八二）『母畑地区遺跡発掘調査報告』

富岡市教育委員会（一九八一）『本宿・郷土遺跡』

一五（二二七）

群馬県教育委員会 (一九八二) 『十二遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』

群馬県教育委員会 (一九八六) 『北原遺跡』

鶴ヶ岡町教育委員会 (一九八五) 『お寺山遺跡』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (一九八五) 『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林・下南原』 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告』 五〇集

集

港区教育委員会 (一九八八) 『増上寺子院群』

新宿区南元町遺跡調査会 (一九九一) 『發昌寺跡』

印旛郡市文化財センター (一九八一) 『千葉県佐倉市弥勒日暮台遺跡岩富菰山地区遺跡発掘調査報告』

我孫子市教育委員会 (一九八一、八二) 『鹿島町遺跡第三次、第四次発掘調査報告』

流山市教育委員会 (一九八八) 『千葉県流山市三輪野山第三遺跡』 『流山市埋蔵文化財調査報告』 六

奈良地区遺跡調査団 (一九八六) 『受地だいやま遺跡』

山梨県教育委員会 (一九八五) 『北掘遺跡』

長野県考古学会 (一九六七) 『海戸・安源寺』

古代学協会 (一九八三) 『平安京左京三条三坊十一町』

堺市教育委員会 (一九八三) 『調御寺跡』 『堺市文化財調査報告書』 二〇集

倉敷考古館 (一九八四) 『城が端遺跡』 『倉敷考古館研究集報』 一八

岡山県教育委員会 (一九七七) 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』 一一

鳥取県教育委員会 (一九八一、八四) 『西桂見遺跡』

鳥取県教育委員会 (一九八四) 『桂見墳墓群』

鳥取県教育委員会 (一九八五) 『徳尾遺跡群発掘調査報告書』

鳥取県教育文化財団 (一九八六) 『大熊段遺跡』

山口市教育委員会 (一九八八) 『瑠璃光寺遺跡』 『山口市埋蔵文化財調査報告書』 二八集

文化財調査報告書』 二八集

北九州市教育文化事業団 (一九八六) 『北方遺跡』 『北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査報告』 四八集

福岡市教育委員会 (一九七六) 『板付周辺遺跡調査報告書』 (二)

桜木晋一 (一九九〇) 『九州の六道銭研究の現状と課題——考古学的観点から——』 『九州帝京短期大学紀要』 一一

(二)

桜木晋一 (一九九二) 『九州地域における中・近世の銭貨流通——出土備蓄銭六道銭からの考察——』 『九州文化史研究所紀要』 二二六

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集

熊本県教育委員会 (一九七三) 『尾窪』 『熊本県埋蔵文化財調査報告書』 一一集

鹿兒島県教育委員会 (一九八三) 『成岡・西の平・上の平遺跡』 『鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書』 二八集